

衣料品が新たな資源に

綿繊維をバイオエタノールに変えることで「衣料品の100%リサイクル」を可能にする実験に参加した株式会社良品計画。「FUKU-FUKUプロジェクト」と名づけられた画期的な取り組みに、今注目が集まっています。



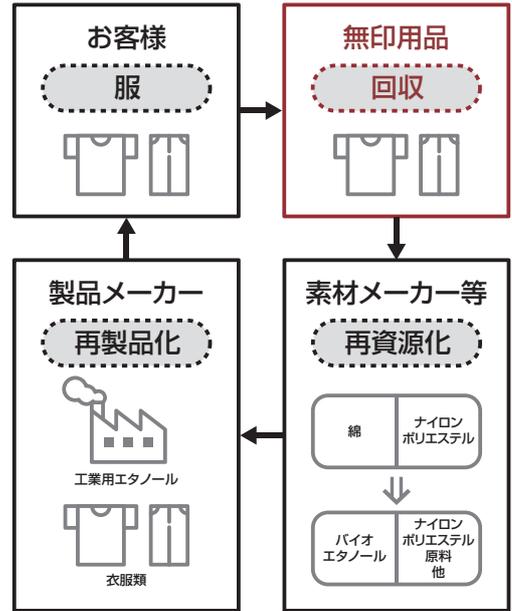
株式会社 良品計画
(東池袋4-26-3)
<http://ryohin-keikaku.jp>
企画室 環境広報担当課長
赤峰 貴子さん

「環境商品としてお客さまに押し付けるのではなく、無印良品であること自体が環境により商品でありたいと思っています。デザインや使い勝手の良さで手に取っていただいた商品から、環境についても考えていただけたら最高ですね。」と語る赤峰さん。

中小企業基盤整備機構によれば、2004年に国内で生産された繊維製品は230万トン、うちリサイクル等で再利用されている繊維は23万トンですので、少なくとも生産された86%の繊維製品は捨てられています。お客さまからも「不要な衣料品をごみにしないで、リサイクルしてほしい」という声が多数寄せられ、当社としてもこの現状を何とか改善したいという思いがありました。

そこで、衣料品リサイクルの現状を変える実験に参加。お客さまに回収を呼びかける「FUKU-FUKUプロジェクト」を2009年8月1日～10月31日の間、実施しました。この試みは、日本環境設計株式会社の世界初といわれる技術開発を活かし、「綿繊維」を石油代替燃料として注目されている「バイオエタノール」に変えるというものです。企業連携の技術で綿をバイオエタノールに再生し、その他の繊維は原料として再資源化されるため、衣料品の100%リサイクルが可能です。

お客さまからは「待ってました！」との声も多く、今回は東京と神奈川の32店舗で、6000枚以上の服が集まりました。この取り組みは従来にはない画期的なものであり、これからもぜひ発展させていきたいと考えています。



衣料品リサイクルの流れ

回収した衣料品の綿をバイオエタノールに再生し、工業用エタノールや石油に変わる燃料として利用します。またナイロン、ポリエステルなど、綿以外の素材は、再びナイロン、ポリエステルなどの原料へ再資源化します。



「集める」ことを重点に制作されたポスター。親子で見てもらえるように、子どもの目をひくデザインにしてある。

エドらむ ④

のみ ざり
～鑿、錐、大工のひとりごと～
古来、自然との調和を大切にしてきた日本人。江戸時代の長屋から現代の住環境を考えてみます。

江戸時代、庶民の住まいといえば長屋でした。造りはもちろん木造で、湿気が多い夏の江戸の気候に適していたようです。風通しがよく、打ち水をすれば涼しい風が家の中にまで通る、自然環境と調和したエコな住宅でした。長屋は「九尺二間」といわれるように、間口が九尺、四畳半の座敷と一畳半くらいの土間という間取り。ここで、家族四～五人が寝食すべてを行い、部屋の柱には子どもの成長を示すいくつもの線が残され、狭いながらも家族のぬくもりが感じられる住まいでした。

そんな時代も今は昔、家の周りは高層ビ

ルやマンションに変わってきています。スイッチひとつで部屋は明るく、温度調節も自在なエアコン、家事の合間にできあがる調理器具、なんと快適なことか。しかし部屋には身長を示すキズのついた柱もなく、機密性が高い室内であるがゆえに結露やカビの心配をしなくてはならなくなりました。

そんな住宅も最近は見直されてきています。「エコ住宅」として自然採光やソーラーパネル、雨水利用などが積極的に取り入れられるようになってきました。生活環境の快適さを追求しつつも、自然との調和を取り入れていきたいものですね。



文／高橋 隆さん (西巣鴨在住)
毎年小学校のヤゴ救出作戦でリーダーとして活躍